

## 文明素としての類性

河 底 尚 吾

1

クレータ島中部にあるクノース宮殿は、古代から“迷宮”として知られている。外敵（主として海賊）の侵入をふせぐために、廊下を袋小路にしたり、せまい階段をあちこちに設けて通路の行く手をはばんだり、かなり内部のようすを熟知していなければ、王の居室に達することができないように設計されていたと言われている。現在では、廃墟と化している王宮も、発掘された廊下をあるいてみると、たしかに昔日の迷宮を偲ばせるところが各処に残っている。この迷宮の考案者といわれるダイダロスは、どのような想像をめぐらせて設計にとりくんだのであろうか。

しかし、また、現代の考古学によれば、この王宮はいくたびかの大地震によって破壊され、そのたびに補修や増築がおこなわれたが、もともと丘陵という不利な地形のせいもあって、新旧の床に段差ができたたり、廊下を壁で仕切らざるをえなくなったりして、結果的に“迷宮”となってしまったとも考えられている<sup>1)</sup>。いずれにしても、「両刃の斧」を意味するラブリュス (Labrys) という語が「迷宮」や「迷路」 (Labyrinthos) をあらわすようになったのは、聖器としてあがめられていた「両刃の斧」が、建築上複雑な構造をもつ王宮内の各処に安置されていたことに由来している。つまり、「迷宮」とは宗教的な聖域と現実的な日常生活の場とが複雑にからみあった世界にちがいないのである。

私たちが或る問題に直面して、その内奥に深入りしたとき、その問題を解決する方法を見うしなってしまうと、たちまち進退きわまる状態が現出する。先に進めないばかりか、後にももどることができない。こういう状態を「迷宮入り」と私たちは呼んでいる。そういう状態におちこんでしまうと、私たちは自分がいまどこにいるのかさえ見当がつかなくなる。あれほど自信をもって問題解決へ向けてふみこんで行ったのに、いまやすっかり自信をうしなった自分の姿をそこに見て焦燥するばかりである。「迷宮」は「混沌」<sup>カオス</sup>ではない。両者のもっとも明確な相異は、迷宮には通路があるけれども混沌には通路がない、というところにある。迷宮は、ともかく生活の場として存在していながら、その場が見うしなわれている状態であり、混沌はそれ自体独立して存在する永遠の「元点」なのである。私たちはひとたび混沌に遭遇するなら、その茫洋として果しなくひろがる空間の前で立ちつくすほかはない。そこには足をふみ入れる通路がないのだから。

ところで私が比喩的にこれまで使用してきた「通路」とは、いったいなんであろうか。その解明こそが「迷宮」や「混沌」から脱出しうる重要なカギになるはずである。まず、「混沌」<sup>カオス</sup>からはじめることにしよう。自然界では、あらゆるもののはじめは「混沌」としている。古代ギリシアの詩人 Hesiodos は、「ともかく最初にカオスが生まれた<sup>2)</sup>」<sup>カオス</sup>と言い、「カオス」を始元とする万物が<sup>カオス</sup>つぎつぎに生成されるさまを

『神統記』で歌っているが、これは元点としてのカオスが、運動体として現実化されたことを意味している<sup>3)</sup>。つまり、カオスの外部に、しかもカオスの「つぎに」、<sup>ガイアー</sup>「大地」<sup>タルタロス</sup>「奈落」<sup>エロス</sup>「愛」が出現し、カオス自体も「暗」<sup>エレホス</sup>「夜」<sup>ニュクス</sup>を生成している。その後はこれらを母体にして、自然、神神、生物、人間などの有形ばかりでなく、「業」「運」「死」「眠」「夢」「難」「苦」など無形の存在も一定の順序を保持しながら出現してくるのである。この生成のタイプはギリシア神話だけに特有のものではなく、私たちが知っている他の神話、或は創世記述にも共通して見られる一つのパターンであって、『神統記』の著者ヘーシオドスの独創とばかり言うてはいられない。ギリシア神話の直系であるローマ神話の作者 Ovidius は、「海と陸とすべてを蔽っている空とが現われる以前に、自然の面相は宇宙全体にわたり同一であった」と語りはじめ、それを「カオス」と呼んでいる<sup>4)</sup>。しかし、オウィディウスはヘーシオドスとはちがって、「カオス」を具体的な「物」として把握し、「粗雑で未調整の塊で、しかも動きのぶい重いもので、一つところに寄せあつめられてはいるが、うまくまとめられていない物質のちぐはぐな種子」と表現している。それは日本神話の『古事記』も同趣であって、「夫れ混元既に凝りて、氣象未だ効れず。名も無く為も無し。誰か其の形を知らむ」<sup>5)</sup>と冒頭でのべている。ここには形の定まらない凝固物が世界のはじめに登場しているわけである。表現はちがっていてもローマ神話に共通するところが大きい。しかし、旧約聖書の『創世記』では、「初めに、神が天と地を創造した」と、いきなり自然が出現する。しかもそれは「神」によって創造されたものであり、「神」から生成したものではない。したがって、冒頭でのべられている「天」と「地」は、客観的に自然物として説明されうるものでなければならない。そうでなければ、「天」も「地」も「神」と同時存在者となり、三者は創造主、被造物の区別ができないはずである。実

際はどうか。『創世紀』では冒頭の記述の直後に、すかさず、客観的な自然物の説明がつづけられている。「地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた」とのべられ、事実上の本論はここから開始するのである。つまり、冒頭の一節は記述者が「神」の事蹟をのべるにあたっての要約と見るべきであろう。これに類する記述は他の箇所でも見られる。たとえば、人間の創造(1.27に対する2.7, 2.18～23)や男女関係(2.24)などがそれである。このように考えるなら、「地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にある……」という表現は、他の神話記述と同類と見なすことができるだろう。すなわち、「元点」としての「カオス」或は「神」が存在し、生成するにしろ、生成されるにしろ、そのつぎに「大地」が、そして「奈落」が、「愛」が、さらには「暗」や「夜」、「明」や「昼」が順を追って間断なく出現してくるのである。『創世紀』では、「光(昼)」、「闇(夜)」が第一日に出現し、「天」が第二日、以下このようにして、第三日には「地」「海」「植物」「果実」が生じ、第四日に「光るもの(太陽、月、星)」が生成され、第五日には「海の動物」と「空とぶ鳥」とが現われる、というぐあいにはただ順を追うだけでなく、間断なく時間が明記されている。

或る物のつぎに別の或る物があるということ、しかもそれが前であれ後であれ任意にあるのではなく、序列にしたがって「場」が定められていることは、あらゆるものの生成に見られる基本原理であると言えることができる。それは場の確定とともに時間の配列と厳密に適應している。A B C D という記号の順序は、場の配置であり、かつ時間の配列を表現している。私たちが抽象的な「時」を意識することができるのは、それに対応し間断なく連続して移動する「場」を、感覚によって認識するからである。「場」は単なる空間ではなく、つねに時間がぬりこめられた「空間」である。したがって、私たちが意識

する「時」はもはや純粹に抽象化された時間ではなく、具体的な「場」を背景として把握される「時間」である。

時間は不可逆的であり、空間は可逆的である。時間を逆行するには、あらたに別の時間を費やさなければならない。過去を知るには未来の時間を必要とするのである。しかし、或る場所を逆行するには、あらたに別の場所を必要とはしない。その例として、東京—大阪間を走る列車の往復運動とその時間の関係を考えてみれば、すぐにわかることである。さらにまた、時間には反復性がないが、空間には反復性が認められる。音楽は時間の芸術だと言われている。しかし、音楽における時間は明らかに自然の時間とは相異なる。それは時計の時間であり、人工の時間なのである。私たちは任意に時計の針をとめたり、逆行させたり、おなじ時刻をくり返したりすることができるし、音楽家も必要とあれば演奏を中断したり、なんどでもおなじフレーズをくり返すことができる。おなじ演奏をくり返しているあいだに、自然の時間は着実に流れている。人工の時間と自然の時間が一致するのは、いわゆる生活時間であって、時計がとまったり、その針を逆行したりしない時間、あるいは演奏家が演奏を中断することなく演奏している時間である<sup>7)</sup>。

人間が人工の時間を生み出したのは、日常生活のなかで道具をつくり出したことと深くかかわりがある。夜明けから日没までの昼の時間は、火をつくり出したことによって、夜明けから火を消すまでの時間に延長され、月の満ち欠けは、水時計の点滴におきかえられ、人間にとって利用するのに便利な時間を任意に再現することを可能にした。『創世紀』に書かれているように、「こうして夕があり、朝があった」ことによって一日を算出するかわりに、〈こうして水槽の水は下端の線まで達した〉ことによって一日の経過をつけることもできるのである。人間が「自然の時間」と「人工の時間」を日常生活にとり入れたとき、人間は自然に順応するだけで

なく、自然を利用する技術を体得したのである。「彼らには冬も、花咲く春も、果実がみのる夏も、区別するたしかな<sup>しるし</sup>印がなにひとつなく、彼らのすることなすことすべては、なんの見さかいなしに、それぞれのなり行きまかせであったのだ、そこでとうとう天の星が東に昇り西に沈むという、むずかしい観察を私が彼らに教えてやったわけだ」<sup>8)</sup>と、悲劇『縛られたプロメテウス』のなかでプロメテウスが誇らしげに訴えている姿は、人間が自然に対して受動的な立場から、積極的に自然を観察する立場へと転換して行く姿勢とかさなりあう。自然の内部に埋没した人間が自然の運動とともに行動することをやめ、自然の外部へとび出して自然を客観的に観察しようということは、自然とは異なる「場」を人間が生成したことにはほかならない。つまり、プロメテウスは自然からの人間の独立を宣言したのである。少なくとも紀元前5世紀のギリシア人たちは、作者アイスキュロスとともに、そのプロメテウスの宣言を肯定し、それをよしとしたのだ。すなわち、自然の火とおなじ火を人間が技術によってわがものにするのができたのは、自然の空間に対応する人間の「場」と、自然の時間と入れかえ可能な人間の「時」とを生み出したことを意味する。

逆行することができない時間を逆行することができるのは、想像の「場」を措いてほかにはない。結果から原因へさかのぼることが可能なのは、想像の「場」にぬりこめられた「人工の時間」だけに許されている特権である。任意に逆行し、反復し、元因と結果のあいだを往復し、その成り行く道をたどって始点から終点にいたる方法を知り、さらにその全行程を反復して人間は技術を体得するのである。この技術こそプロメテウスが人間に与えた「時」と「場」であり、人間はその「時」と「場」のなかで自然とおなじ火を再現したのである。

自然が生成した火は、おそらく人間の渴望的であったらう。それは創造の極致であるからだ。火にかぎらず、自然の創造物である大地

も海も太陽や星もすべて人間の驚異と羨望の対象でないものはない。人間の学問の始元がそれら自然の水、火、地、大気、等に発していたのも、それを証明するなによりの証拠である<sup>9)</sup>。始元としての「創造」は、それがなんであれ、唯一無二である点において個性的であり、逆行を許容しない点において時間的である。そのオリジナリティは時間的階列構造をもつが、空間においてそれが実現されるゆえに、空間を欠いた創造は、形のない空虚な「混沌」状態をまねくのである。

## 2

話はクノーソス宮殿にもどる。迷路を内蔵しているこの建造物は、外敵の侵入をふせぐ目的であるにしろ、地形上やむをえない結果であるにしろ、日常生活を営むには不便であったにちがいない。しかし、秘密を外部にもらさないためには、都合のよい構造であっただろう。伝説によれば、ミーノース王には半牛半人の息子がいて、王はこの息子をかくまうために、ダイダロスに命じて迷路をつくらせたという。アテナイの王子テーセウスが彼を退治しようと、この宮殿にのりこんできた話はあまりにも有名である<sup>10)</sup>。テーセウスは、ひとたびこの王宮に足をふみ入れた者は、二度と生きて故国へ帰れないことを知っていた。もちろん、迷路の存在も、それを承知で彼は足を踏み入れたのである。しかもその迷路を通りぬける自信があったわけではない<sup>11)</sup>。しかし、彼はこの怪物の犠牲となる同胞を救出したい一心で迷路にふみこむ決意を固めたのである。おそらく、彼がその無謀な挑戦を独力で実行していたなら、たとえ超人的英雄であっても帰らぬ人となっていたであろう。ここに一人の助力者がいた。ミーノース王の娘アリアドネーである。彼女はテーセウスを恋するあまり、迷路脱出の秘密を彼に教えた。彼の命を救うのは、たった一本の細い糸であった。彼はそれを入口の柱に結びつけ、その糸をたらしながら彼女から教えられたとおりに迷路

を奥へすすんで、ついに怪物の居室に達し、首尾よく目的を成就したあと、たらしした糸をたよりに無事迷路から脱出することができたのである<sup>12)</sup>。

言うまでもなく、私はいま伝説物語をたのしんでいるわけではない。ただ、私は「迷路」と一本の「糸」に注目するだけだ。この伝説(夢物語でもかまわない)が私たちに訴えている一つの真実を、私は篩<sup>ふるい</sup>でふるって取り出してみたいのである<sup>13)</sup>。すでにのべたように、迷路は混沌とはちがって、通路がある。通路がありながら内部と外部が断絶しているのだ。つまり、どこを向いても、どこへ行ってもおなじ空間が連続しているわけで、空間に区切りがなく、場所の特定ができない。しかし、確実に時間は流れていて、彼が足を一步ふみ出すたびに時はきざまれて行く。もしもこのばあい、テーセウスのように糸をもたない者であれば、ここぞと思う場所には壁が立ちふさがり、うまく歩き通したと思えば前にいた場所に舞いもどっていることに気づき、しだいに焦燥感がつのって身うごきができなくなるかもしれない。彼があせるのは、期待をこめて行動する結果がことごとく裏切られるだけでなく、彼はたえず時間を意識しているからである。彼は限られた時間のなかで、限らない空間を通過しなければならないのだ。しかし限りなく反復される「場」の移動は、形態の変化をうしない、量的変化を増大して行く。一步の時間に対応する場の変化が現出するならば、その場は明らかにその前の場とは形態を異にする場でなければならない。どこまで行ってもいつもおなじ場所だという感じは、直前の場と直後の場とが同質的であるということであって、おなじ場が重複しつづけるだけである。そこには集積された龐大な場の空間がひろがっているだけで、相互に排除しあう異質の場の生成は見られない。これは、「混沌」のように、なにか「ごちゃごちゃ」した、形の定まらないものはあっても、空虚な感じがする存在とは対照的である。一定の形がないということは、たえ

ず運動していることであり、直前と直後とで異質のものが生成していることを意味する。それはまさしく「時間」の本質を言いあらわしている。時間とは反復不可能な個体の連続であり、瞬間的にも永久的にも、その前とは異なる場をその後生成しつづけてやまない。しかし空間は反復可能な類体の集積であり、「ここ」において存在する場は永遠のかなたにおいても再現される場として持続する。

そこで、とりあえずのまとめとして言うならば、「混沌」とはいくら時間が経過しても一定の形（「場」）が生成されない状態であり、「迷路」とはいくら場所が移動しても、一定の形（「場」）だけが出現する状態である。言い換えれば、「混沌」には時間的要素はあるのに空間的要素が稀薄、「迷路」には空間的要素はあっても時間的要素が稀薄、とすることができるだろう<sup>14)</sup>。

しかし、日常生活においては、私たちは「混沌」に対してなんらかの形を与えようとし、「迷路」からはなんとかして脱出しようところをみる。さらに一般的に言うなら、漠然とした対象はひとつひとつ解きほぐして個別化するが、反復する道や逆行する道に対しては二度とふみこまないようにマークをつけたり、記憶したりして、通過したどの道にも共通しない一つの道を見つけ出し、直面する問題の解決をはかろうとする。先の神話や創世記でも例外ではない。一定の形がない「カオス」からは「闇」と「夜」が離脱し、「闇」と「夜」は融合によって、「明」と「昼」を生む。また、「光」は「やみ」と区別されて「昼」と「夜」になり、形のない「水」は二つに分裂して「空」を生じる、というぐあいにそれぞれ明確な形をもつ個体として存在するようになった。「迷路」のばあいは、いっそう明確である。テーセウスは外部と内部をつなぐ一筋の糸にしたがって進むだけで、容易に困難を脱出することができた。この一筋の糸とはなにを意味するのであろうか。それは連続する一種のマークであり、ひとつの記号には

かならない。また彼に中断なく情報を与えるメディアでもある。彼がおなじ場所に停滞することなく、あらたな空間に足を一歩ふみ出すことができるのは、刻々と切れ目なく彼に情報を伝えつづける糸のおかげである。彼はもはや時間をうしなった小羊のように、おなじ通路を右往左往する必要はない。この一筋の糸があやまって切断されたり、故意にまちがった柱に結び変えられたりしていないかぎり（そういうことはないとは言えない）、彼はその糸が指示する通りに無事に外へ出ることができるのである。

糸はどんなに複雑に曲折していようとも、それが一定の順序を保って変化を持続するなら、一本の直線とまったく変るところはない。それこそが、まさに複雑なものを単純化する迷路解明の原理であって、あらゆる発展の形式でもある。一定の順序を保って変化を持続するとは、時系列にそってものごとが進行することを意味している。ここに私たちは時間と空間のねじれた関係を発見する<sup>15)</sup>。現実にはさまざまな形態の通路があり、刻々と時間とともに移り変わる状況が展開して行くのであるが、それも一回かぎりであって、なん回となく行きつもどりつしているうちに、移り変わる状況はしだいに類似の状況となり、ついには同一の状況に集約されてしまう。「いつまで歩いてもおなじ場所」と思い知らしめるのが迷路の本質であって、そこにはもはや刻々と変り行く生産的な空間の移動は消えはて、同一場所に時間は停止してしまっている。そのような空間を私たちは「場」として受容し、停止した時間をそのなかに葬ってしまうのである。つまり、移り行く時間が不動の「場」と化してしまうのだ。この否在化した「時」を復活させるには、同一の「場」として容在する空間を分化し、分化されたそれぞれの空間が相互に異質の「場」として連続しうるようなメディアを必要とする<sup>16)</sup>。それが「アリアドネーの糸」なのである。このなんの変哲もない連続する一本の糸は、実は変化しつづけてやまない、しかも絶対に逆行や反復を許容しな

い時系列の申し子として、同一と思われた空間をつぎつぎと変えて行く。この糸にそって進むかぎり、周囲の状況は刻々と変化し（ということは二度とおなじ「場」をふむことなく）、着実に目的地へ到達することになる。このように、変化する時間が「迷路」によって不変の空間に収束したり、不変の空間が一本の「糸」によって運動する時間にとけこんでしまうという現象が意味するものは、自然と人間、あるいは現実と意識との関係のありようを明確にしめしていると思われる。

迷路の内部と外部とをつなぐメディアは、もちろん、糸のように一本の連続した物体でなくともかまわない。点滅する光の列でも、かすかに耳に達する断続音でも、極端に言えば、熱でも匂いでもよいわけで、私たちの感覚が把握しうるなんらかの記号であるならば、それらはただちに私たちの意識によって連続する信号へ転換され、そこに確実な情報としての意味を生成するのである。ここで注意しなければならないのは、意味の生成にはなんらかの連続性、または継続性が必要であり、ばらばらな点では意味をなさない、ということである。このばあいの連続性というのは、共通する個の集合を一つの単位とする要素であって、それ自体は他と異質であるが共通性において一つの意味をもっている。たとえば、たぐって行く糸は麻か綿か毛かでつくられ、その色は赤、白、青のどれかであるような糸がえられる、といったぐあいである。いま、それが「赤い毛糸」であるとしよう。その「赤い毛糸」は一つの個体ではあるが、全体の長さの各部分は他の要素と対応する意味をもつ、最初の5 mは廊下、つぎの3 mは小部屋、つぎの10 mは大広間、つぎの5 mは別の廊下、さらに5 m先は昇り階段、というように。えられた一本の長い「赤い毛糸」は、まるでそのなかに現実の廊下、広間、階段等の「場」が組みこまれているかのように、つぎつぎと間然するところなく、まとまった意味をもつ個体の階列として連続して行くのである。E.

Reach は意味の生成について、つぎのような見解をのべている。

非言語的コミュニケーションのシステムのなかで現われる指標は、話し言葉で現われる音の要素のように、それ自体切り離されては意味をもたない。意味をもつのは関係する項の集合の各項としてである。記号や象徴が意味を獲得するのは、他の対立する記号や象徴から区別され対照されるときだけである<sup>17)</sup>。

——『文化とコミュニケーション』

ことばが意思の伝達手段として使用されるとき、その構成要素である音がばらばらであっては、意味をなさないのは当然である。音が区切られた一つの集合体としてまとめ、さらにそれらの集合体が階列的に連続して行くことによって、それらに対応する意味が生成されるのである。「赤い毛糸」のばあいも同様であり、それはひとつの文脈を構成し、その連続性によって意味をはじき出す。「赤い毛糸」は「白い麻糸」であってはならず（それは別の意味を生成する文脈であるから）、また、えられた一本の糸は始点と終点とがあり、不可逆的に一貫して目的とするところを目ざしていなければならない。さまざまな色の、さまざまな種類の糸の束は、まるでさまざまな文脈の文章とおなじく、意味が混乱し、あらたな迷路をつくりあげてしまう。さまざまな個体のばらばらな集合では意味をなさないのだ。エドモンド・リーチが言うように、「関係する項の集合の各項」が他と区別され、対照されるときに意味をもつということは、明確な文脈の形成である。それは各項が独立していると同時に、ひとつの流れ、あるいは運動、に組みこまれて行くプロセスでもある。廊下、広間、階段、踊場等のそれぞれ独立した個体が、王宮の奥から入口まで一貫した通路になるとき、それはひとつの文脈として意味を生じる。

そのような意味の展開は、あの「混沌」から

「闇」と「夜」が自生し、さらに「明」と「昼」が発生する自己増殖、I. Prigogine が言う「自己組織化」(『混沌からの秩序』1984)<sup>18)</sup>とはまた別の軸にそって、積みかさね方式で量を拡大しながら階層を形成する。糸による「迷路」からの脱出は個々の「場」の不可逆的な集積によって完成するのであるが、ひとたび完成すればそれはひとつの型として反復再現しうるものである。

## 3

すでに見たように、「迷路」の形成は時間の対応をうしなった、区切りのない「場」の出現を意味するものであった。「いつまでも形態が変わらない」という表現のなかに、「迷路」における時間と空間の関係が言いつくされている。それは「迷路」の本質であるが、さらにまた重要な問題となるのは、その「迷路」からの脱出、あるいは解消についてである。その一つの解答が「赤い毛糸」による方法であることは、あらためて言うまでもない。

迷路とはなにか、という問題と、迷路からどのようにして脱出するか、という問題を私は同時に提起し、それぞれに検討を加えてきたのであるが、本論もそろそろ「迷路」から脱出して、つぎの新しい段階へすすまなくてはならないところへ来たようだ。つぎの段階とは、不可逆的系列に抵抗する場系列の発展についてである。

私たちが迷路を迷路でないようにしてしまふには、逆行や反復をさける通路を見つけ出すことである。と、ひと口に言っても、その方法を考え出すのはけっして容易なことではない。まさしくそこには頭の中がまっ白になるほどの、わけのわからないカオス状態がただよっていると見えるだろう。しかし、外部と内部をつなぐ「一本の糸」に思い至り、それが実行され、首尾よく成功すれば、もはや私たちは迷路に対して恐怖を感じることはない。テーセウスが恐れることなく迷宮にとびこんで行ったのは、この方法を知っていたからである。彼はその方法を

アリアドネーから教えられた。また彼女はそれをダイダロスからひそかに伝授されたという<sup>19)</sup>。そしてその天才的な工匠は自分ひとりで一本の糸を考えついたのである。したがって彼は迷路づくりも、迷路脱出法もひとりで考案したことになる。またここで私は言っておかねばならない。そのような話が事実であるかどうかということは当面の問題外であって、重要なのはだれかが迷路脱出法を考案し、だれかがそれを伝授し、さらにだれかがそれを実行したという一連のできごとの経過なのである。

考案→伝授→実行という図式は、考案→実行→伝授→実行という形式をとるのが普通であるが、おそらくダイダロスのばあいは、自分で実行してみる必要がないほどその考案を確信していたのであろう。この一連の流れを構成している重要な二つの要素、「考案」と「伝授」はつぎにつづく「実行」を介して、たがいに対立する方向転換を実現しているのである。まえにものべたように、ダイダロスが考え出した方法は連続する一本の糸玉の両端を外部と内部でつなぎ、唯一の通路をつくることであった。これは逆行をゆるさない時系列にそって、たがいに異質の個体を連続的に生成する、いわば創造の典型であるが、考案者の眼は一本の糸よりもむしろ入り組んだ一つ一つの廊下や部屋や階段の特質、それらの配置、方向、長さ等の組みあわせに集中したにちがいない。さまざまな思索の結果、つくりあげられた唯一の通路、それこそが工匠の目ざした最終目標であり、作品であったのだ。

テーセウスのばあいは、眼前に展開する一つ一つの廊下や部屋や階段などは、もはやどうでもよかった。彼の眼は、にぎりしめた一本の糸に集中していればよかったのである。さまざまな特質をもった個体ではなく、それらの個体を共通して突きぬけるものこそ、彼の最終目標を達成するのに必要なものだった。すなわち彼にとっての目標とは出口であり、したがって一本の糸あるいは通路は、手段(メディア)であっ

たのだ。

かんたんに言えば、ダイダロスは一つの目的のために作品を生み、テーセウスは別の目的のためにその作品を利用したのである。この文脈のなかには、初元的な生産と消費の論理が芽ばえている。さらに、アリアドネーの存在および彼女の行為をその中間に配置するなら、流通の原点も確認することができる。ダイダロスが考案した通路は、「混沌」のなかから時系列的に「場」を具体化した作品であるが、これは通路でありかつ普通の意味での通路ではない。通路であって通路ではないという虚構性の内奥に創造の真意が息づいているのである<sup>20)</sup>。言いかえれば、この「通路」は仮象としての通路であって、現実的にはこれに対応する通路は存在しない。その意味において、科学分野におけるイリア・プリゴジンの非平衡に対する見解は有益である。「すべてのレベルにおいて、巨視的物理学のレベルであろうと、ゆらぎのレベルや微視的レベルであろうと、非平衡が秩序の源である。非平衡が『混沌から秩序』を生み出す。」<sup>21)</sup>つまり、意識における「非平衡」は、虚構を生み出すことによって、たえず現実におびやかされ、形のないものに秩序をあたえて、現実と平衡関係を維持しようとするのである。あらゆる生成、あるいは創造行為が、不安定でしかも時系列からの逸脱をかたく禁じられている点でも、プリゴジンのつぎのことばは適切に「通路」の論理と対応している。

不可逆過程の微視的理論が、従来の巨視的理論にどんなによく似ているかは驚くばかりである。いずれの場合も、エントロピーは当初否定的な意味をもっていた。巨視的側面では、それはある過程、例えば熱が冷たいところから熱いところへ流れることを禁止する。微視的側面では、それはある種の初期条件を禁止する。許されたことと、禁止されたことの区別はずっと力学の法則によって保存される。積極的な面が生ずるのは否定的な面から

である。積極的側面とは、エントロピーの存在と、その確率的解釈である。もはやある巨視的レベルにまるで奇跡のように不可逆性が発生してくるのではない。巨視的不可逆性はわれわれの住む宇宙の時間軸の一方向性をあらわすにすぎただけである。<sup>21)</sup>

——『混沌からの秩序』1984

「巨視的レベル」に立つならば、ダイダロスもテーセウスも、さらにアリアドネーも、おなじ目標を旨ざしていたと言えよう。しかし、アリストテレスの目的論的レベル、あるいはニュートンの力学的レベルでこれを見るならば、ダイダロスの目的は通路発見（実際には糸玉を使用する方法）にあり、アリアドネーの目的はその方法を伝達することにあり、ただひとりテーセウスだけが迷路脱出という大目的に合致した方法を実行するのである。ところが、方法の創造から伝達、実行にいたるまで、逆行することなく、まぎれもなく一本の糸で連続しているこの関係も、些細に見ればその方向はそれぞれ相違しているし、それぞれの時点で「場」は完結している。さらに、それぞれの行為者はそれぞれの性格をそなえた完全な個体として独立している。それは明らかに相異なる個の集合であり、同時に社会形成の一つの最小単位をしめしている。このように独立したそれぞれの個は、一方でそれ自身の存在により個体たらしめる オンタルケー ontarche にもとづき、他方では他との相互作用で類体たらしめる フィラルケー phylarche を契機として成り立つのである。個人におけるこの二重構造については、すでに多くの人々がさまざまな表現で指摘している。

私が他の箇所で紹介したもののうちから、いくつか例をあげてみよう。社会心理学者の E. Fromm は、「一人の人間は、全人類を代表している」と言い、「彼は自らの特殊性をもっている」という意味で、独自の個人であり、同時に人類のもつあらゆる特徴の代表者でもある<sup>23)</sup>とのべている。これは個体が同時に類体である

という証言である。しかし生物学的個体は、社会学的個体とは内容を異にしているので注意しなければならない。Ch. Darwin は有名な『種の起源』(第二章)で、「同種のすべての個体がまったくおなじ鋳型で鋳造された」と想像するような者は、まったくいない。これらの個体的差異は、われわれにとって、ひじょうに重要である<sup>24)</sup>と指摘している。生物分類学上、「種」というのは分類の最下位をしめるカテゴリーであるが、種=個体という説と、種=複体という説があって、個人=1人という単純明確な社会学上の認識では割りきれないものが、生物学的分類には存在する。ダーウィンのばあいは、同種のなかにも差異があると認め、それを彼の進化論の根拠にしているのだが、これは異質は等質から生まれるという例である。しかし今西錦司の説では、「種と個体とはもともと二にして一のもの」(『ダーウィン論』)と考え、「種」=「個体」であって、その個体はすべて同類であり差異を認めない。そのために一般的な個の概念と「種」の概念が混乱しないよう、彼は複体種と個体(単体)種を区別し、アシナガバチやアリ等の単体を genion, その複体を genia と呼んで、この genia が一般のライオン、カエル、トンボ等の単体 specion に相当する「種」と見なしたのである<sup>25)</sup>。ここに見られる等質複体化の視点は、自然界において同一者が複写される道を開く重要な第一歩だと私は思う。

「種」の複体を等質であるゆえに一つの個体とする考えは、複数の「場」がたびかさなる反復によって、一つの「場」に収束する「迷路」の論理に通じる。迷路における廊下や広間や階段等の一つ一つの「場」は、本来の機能をうしなっている「場」であって、そこから新しく生成されるものはなにもない。しかもその中の一つが欠落しても、全体に変異は生じない。今西説の genia は、言いかえれば、そのような「場」の集合であって、それぞれの「場」には個性は認められない。つまり genia は「迷路」そのものと言えるであろう。今西説にしたがえ

ば、「生存競争の有無を問わず、また進化が促進されているか停滞しているかを問わず、どの個体かが生きのこり、どの個体かが死ぬのだから、どの個体が生きのこり、どの個体が死んでも支障をきたさない」<sup>26)</sup>ように自然は仕組みられているのである。これではたしかに「自然の仕組みが変らないかぎり」、あたらしい事態は発生しないし、等質の個体がいくら群をなそうとも、それは「超個体的個体」と見なされ、どこまでもおなじ「個」を確保するだけである。「迷路」の論理が再現する元因はここにある。

人間社会において、社会は個人の集合であるとするか、個人は社会の一部であるとするか、という議論は古今東西絶えることなくつづいているが、これは「種と個体とはもともと二にして一のもの」という意見と平行して、これからもくり返し話題となるにちがいない。それらの議論が不毛に終わらないためにも、私たちはめいめいが、あらたな「一本の糸」を見つけ出す必要があるように思う。たとえば、非平衡域から全体を見るプリゴジンの視座は一つの好例である。彼は従来の“閉じた系”である伝統的科学に対して、無秩序、不安定性、多様性、非平衡などの“開いた系”を設定することによって、現代社会の迷路に立ちむかった。それは迷路脱出の強力な一つの「糸」、あるいは「通路」とあると言えるものにちがいない。しかし、個と類の関係をもっとも端的に表現しているのは、バラモンのつぎのことばではないかと思われる。

愛児よ、たとえば一個の土塊によって、すべての土から成るものは知られるであろう。  
— (土から成る) 変容物は、ことばによる捕捉、(単なる) 名称である。ただ土である、ということのみが真実である。

——『チャンドーギャ』6.1.4

この天啓聖典の註釈者である「ヴェーダーンタ学派の学匠」Śankara (後700—750年ころ) は、「壺・皿・釣瓶などという変容物は、単に

ことばによってのみ『ある』と捕捉される。しかしながら、実際には、変容物というものは何も実在しない。なぜならば、それはただ名称にすぎない虚妄のものであり、『土であるということのみが真実である』から」とのべている<sup>27)</sup>。これは「迷路」へ向けての本質論と言うべき見解である。迷路にとっては廊下、広間、階段という「変容物」は、それらの「本質」(質料)である「石」の連続にすぎない。したがって、廊下、広間、階段といった人工物は「ただ名称にすぎない虚妄のもの」であるかもしれない。しかし、ここに一本の糸が媒介として貫通したとき、その「虚妄の変容物」は一変して、飛躍的に「通路」としてよみがえるのである。個個の変容物は、現実的には、「通路」を欠いているものであっても、「糸」を元因とする「通路」の生成によって、ばらばらであった個体の集団は、その「通路」を共通項とする類体として存在する。個体が分有する共通の類性は、類をかさねるごとに成長し発展する。それは時間とともに変化するのではなく、変化を固定して「場」を拡大するのである。

## 4

Voltaire がオクスフォード郊外のウッドストックを訪れたとき、そこにあるブレナム宮殿(Blenheim Palace)を見て、「なんとまあ仰山石を積みかさねたもんだ、味もそっけもない」と言ったそうである<sup>29)</sup>。クノーソス宮殿を見たら、ヴォルテールはなんと云っただろうか。一つの建築物が石の集積物にすぎないと見えるのは、その建築物に「個性」が感じられないからである。「いつまでもおなじ形」という感じは、没時間性の相貌があらわれているのであって、そこには数や量の変化はあっても、質的变化は見られない。M. McLuhan がつぎのように言っているのも同種のことと思われる。「エジプトの芸術は、今日の未開社会の彫刻と同じように、重要な外郭を提示するものであって、この外郭は時の中の瞬間とは何らの関係ももっ

ていない。彫刻は無時間性を志向する。」<sup>29)</sup> 石にとじこめられた永遠の「場」を、意味のある分節として外部に開放するには、その石の塊を対象とする者が「時間」性を吹きこんで、建物ならば柱や壁、階段、破風、屋根、窓、等の個体に、それぞれの意味を発見しなければならないだろう。「意味」ということばを「存在するもの」と言いかえてもよい。存在は不可逆的な時間の運動が目ざすものであり、それらの個々の存在が一つの石の塊から一つの「建物」という「変容物」として生れかわるのに欠かすことのできない要素なのである。「味もそっけもない」とヴォルテールをなげかせた「石の積みかさね」は、彼に「建物」という作りものの存在を感じさせないほど、八方ふさがりの迷路に彼を追いこんでしまっていたのだ。

そのような比喩的な話ではなく、現実には、建築群が集積されて行く現代の都市は、それがコンクリートや石の積みかさねにすぎないならば、人間不在の墓場と言うほかあるまい。しかし都市は人間の生活の「場」であることは自明の事実であるから、都市はそこに住み活動する人間のすべての表情を、ありのまま表現していると言っても言いすぎではない。またその生活の「場」は、必然的に土地と切りはなすことはできない。土地は固定しているので、それが地球上のどこにあろうと、一定の自然環境と密接に関係している。つまり、世界中のどの町でも村でも、そこに生み出される生活現象は、すべて人間と自然および環境によるほかはないのである。都市はそれら生み出された作品のうちの典型と言えるだろう。紀元前5世紀、ギリシアのアテーナイ(Athēnai)市は、アクロポリスの丘を中心に居住区が密集していた。とりわけアゴラー(agorā)と呼ばれる広場には神殿、役所、裁判所、図書館、迎賓館、市場、商店、劇場、造幣所など、市民の日常生活に必要な施設はほとんどすべて集まり、古代都市の一つの典型をなしていた。アゴラー型都市生活は、政治や宗教、経済、教育、娯楽、その他もろもろの

市民活動をふくみ、そこは市民たちが自由に話しあい、意見を交換するコミュニケーションの場であった。残念ながら今日、そこに立っていた建築群は、ヘーパイストス神殿をのぞいて、地上から姿を消しているが、発掘された遺構から見ると、公共施設にくいこむように、数多くの民家が入りみだれ、細く曲りくねった道路がアクロポリス周辺をとりまいている。公共建築物は数万の市民へのサービス機関としては小規模であり、計画的に町づくりをしたというよりは、自由に人びとが集まり、人口の増加とともに民家が空地を思い思いに埋めて行った跡をとどめている<sup>30)</sup>、つまり、アゴラーに象徴されるアテナイ市の特徴は、都市というものが建物よりも人間を中心につくられるという一面を端的に示している、クノーソスの密室的な構築物とは異質の性格をもっていることがわかる。アゴラーは時系列にそって、さまざまなタイプの建造物をつぎつぎに新しく生産して行った階列型であるのに対し、クノーソス王宮は場系列にそって、同種の建造物を積みかさね、新旧入りみだれて構成された、まさしく階層型の発展形式で成りたっている。

前4世紀末期に、異民族であるローマ人たちがギリシアに侵入し、アテナイのこのアゴラー帯を見わたしたとき、彼らは戦乱で荒廃したアゴラーの再建にすぐさまとりかかった。彼らのとった方法もまた階層的で、ギリシア人のアゴラーの再製であることが、かさなりあった遺構から証明することができる<sup>31)</sup>。彼らはまた、前1世紀ごろ、そのアゴラーとほとんど隣接する場所に Forum Romanorum (ローマ人の広場) を、アゴラーとおなじ形式であらたに建造した。ローマ人はアゴラーだけにとどまらず、アテナイの町全体をさらに拡大し、ローマ人の生活感覚をとり入れた建造物を、ギリシア人の独創的な計画にかさねあわせて、つぎつぎと建設して行った。アクロポリス南斜面のディオニュソス劇場に対して、それと並列にヘローデス・アッティクス音楽堂 (odeion) を、

アテーナー・プロマコス (Athena Promachos) 神像に対して、その直線上に位置する前門脇にローマの将軍マルクス・アグリッパ記念碑を建て、さらにその前門を防御するためにもう一つの前門 (1852年にこれを発見したフランス人考古学者の名にちなんで、“ブーレ Beulé の門” と呼ばれている) を建てた。もっとも注目すべきものは、パルテノン神殿の南東部にあって、これと対峙するかまえで建造されたオリムピア・ゼウス神殿である。それはパルテノン神殿をはるかにしのぐ大規模な構造をもつ神殿で、二重周柱式の柱が全部で104本あったと言われている。その基礎はすでに前530年ごろ、ペイストラトスによって定められていたので、600年にわたるギリシア人とローマ人による合作と言うべきであるが<sup>31)</sup>、これも場系列的に発展した例であることにはちがいない。このように、一つの創造された元点をもとにして、その質を変えることなく発展するものは階層構造をとらざるをえない。ここで言う階層とは、視覚的のばあいもあるが、主として可逆的で反復可能の「場」における変化をさしてそう言うのであって、反復熟考することも、商品の再生産も、貨幣の発行も、これらはすべて階層構造をもつ。ローマ人がギリシア人の文化を元型として、広場 (forum) を中心に、神殿、劇場、公共施設、民家、集会所、商店、等を模倣的に再現して町づくりを実行したことは、その場所がギリシア国内であろうとイタリアであろうと、あるいは他のどこの土地であっても、そこにはギリシア文化を元点とする階層的発展形式が認められる。現在、ローマ市内に見られる“Foro Romano” (ローマの広場) は、アテナイのアゴラーと対比することができるし、ポンペイのフォルムやコリントスのアゴラーとも対比することができる。これらの古代都市はすべて一つの都市を基底としてかさなりあう。なぜならそれはアゴラー (あるいはフォルム) を中心とする都市という共通性をもつからである。しかし一方、これらの都市はすべておなじ

ではないことも事実である。都市全体もそうだが、アゴラー（フォルム）そのものも些細に見れば、元型とは対応しない部分が生じる。たとえば、ローマの建築家 Vitruvius は、「ギリシア人はフォルムをゆったりした二層の柱廊で方形に」つくっているが、「イタリアの諸都市ではギリシアのと同じやり方で造らるべきではない」<sup>32)</sup>と、はっきりその相異を指摘している。フォルム全体の構成は元型と共通していても、各部分においては元型からはみ出すところがあり、そのはみ出している部分こそ、まさしくローマ人の個性のあらわれと言うべきであろう。しかもその相異なる部分は、相異なる土地（場所）、すなわち相異なる自然環境において、生活する人間の必然的な選択と創造力によって生じてくるものである。「二層の柱廊で方形に」つくられたギリシア人のアゴラーは、ローマ人の生活感覚や習慣にはかならずしも一致しないので、「演技の場を囲んでなるべく広い柱間が配置され、まわりの柱廊内には両替屋の店が設けられ、上の床には露台が設けられる」<sup>33)</sup>ように設計し、そこで先祖から伝えられている剣闘士の競技がおこなわれる「習慣」が実現できるようにするのである。これはほんの一例にすぎないが、アゴラーとフォルムはその大部分を共通の形式や機能としてもちながら、後発者が先発者の型からはみ出し、後発者のあたらしい型をつくってしまう。その変化はたとえ微細であっても、ローマ人のオリジナリティとして認められるものである。ここにアゴラーとフォルムの類似性が生じ、その類似性によって、私たちはギリシア人の生活様式とローマ人の生活様式の共通しているところと、異質なところを知ることができる。

比較されるいくつかの対象が、たがいに「よく似ている」と判断されるばあいには、共通性の度合いが高く、「似ていない」と判断されるときには、共通性の度合いが低いことは疑いない。その意味において、個性は極度に共通性を排除する。ギリシア的性格が排除されるだけ、

それだけローマ的性格が個性として生成されたのがローマ人のフォルムである。しかもそのフォルムは、一つの個性としてオリジナリティをもつ。それはちょうどギリシア人のアゴラーが一つのオリジナリティをもっているのと同様である。ところがフォルムはアゴラーと多大の共通性を持ち、アゴラーを母型とするのであるから、ローマ人のフォルムは個性と共通性を同時にもつことになる。このように個性を合わせもつ共通性を、ここでは類性と呼ぶことにしよう。そのような類性を形成する元因が類体元 (phylarche) なのである。

ところで、時系列的に運動（生成）する個体は、単独であるかぎり永久に不可逆的であるが、複数体においては個性とともに類性を生じ、類性が多大になれば、階列をはずれて階層構造に仕組まれて行く。蓄積される類体の階層内においては、個性には見られない反復や可逆的運動（生成）が可能である。アテーナイのアゴラーは、ローマ人の模倣によってアテーナイのフォルムとなり、その類体はローマのフォルムとなる。さらにポンペイにもヘーラクレウムにも再生産され、それどころか逆にローマ人が支配したギリシア各地にフォルムが伝播して、アゴラーをフォルム化して行ったのである。現在、ギリシア各地でアゴラーとかさなりあって発掘されているフォルムは、昔日の「ローマ文明」の遺産である<sup>34)</sup>。

私はこれまでフォルムとアゴラーとの対比に際して、いくつかの聞きなれない用語を意識的に使用してきた。元点となるアゴラーには時系列、不可逆、階列、創造、作品、個体元などをあて、フォルムに対しては場系列、可逆、階層、再生産、伝播、類体元などのことばで説明した。時系列にふくまれるそれぞれの用語は、創造を軸とする「文化」の概念を表現するために用意されたものであり、場系列に属するそれぞれの用語は、発展を軸とする「文明」の概念を形づくるための要素なのである。文化については他の稿で論じられているので、ここでは文明につ

いて簡単にまとめておくことにする。

私たちが或ることがらについての因果関係を知ろうとするとき、そのことがらの元因が多少でもわかっていれば、その対象としていることがらの中へすぐ入って行くことができる。しかし、その過程で前途が不明になったばあい、先へ進むことも後へもどることもできない状態におちいる。私たちの人生がまさしくそれである。意識的、悟性的人間はそこに迷路を見る。彼は目的地への道を模索しつづける。そのとき、彼はすでに在る道をたどることをやめ、あらたな道（方法）をつくり出して、問題を解決しようとしているのである。それは創造軸にそって進むことを意味している、「糸」の発見はいままでに存在しなかった「通路」を創造して具体化することなのだ。この方法の独創性は、そのままでは終らない。人間社会においては、それは模倣され、利用され、再生産される。さらにその方法は反復され、蓄積（記憶）されて、知識あるいは技術として発展する。その運動はたがいに共通しあう人間社会の類性によって実現するのであり、個性を主体とする文化の創造軸とは方向を異にする。ギリシアのアゴラーがローマのフォルムへと発展するように、類性を通じあうものは先発するものから後発するものへと、固着的な文化のオリジナリティを複写して伝播する、文明とはその発展の過程の総体なのである。

### 註

- 1) Costis Davaras, *Guide to Cretan Antiquities*, Eptalofos S. A., Athens, 1976, p. 81-82, 171.
- 2) Hesiodos, *Theogonia*, 116. Loeb Classical Library.
- 3) 拙稿『文化素としての個性』参照、横浜国立大学経営学部<横浜経営研究>XIV, 2, 1993.
- 4) Ovidius, *Metamorphoses*, 1, 5-9. Loeb Classical Library.
- 5) 萩原浅男校注、『古事記』, 日本古典文学全集, 小学館, 1973.
- 6) 旧約聖書、『創世記』 I, 1, 2, 日本聖書刊行会, 1970.
- 7) この意味において、非平衡系の熱力学者イリヤ・プリゴジンの意見は傾聴にあたいする。「時間の中に存在するもの、不可逆的なものと、時間の外にあるもの、永遠なものとの間の区別が、人間の象徴活動の根源にあるという印象をぬぐうことはできない。おそらく芸術活動において特にそうであろう。実際、自然の物体、一つの石が、芸術の対象に変換されることは、一面ではわれわれが物質に及ぼす影響と密接に関係している。芸術活動は、対象物の時間的対称性を破る。それは、人間の時間的非対称性を対象の時間的非対称性に転化させた跡を残している。われわれが住んでいる可逆的で、ほぼ周期的な雑音のレベルの中から、確率論的で時間に方向性がある音楽が生まれる。」I. Prigogine & I. Stengers, *Order out of Chaos-Man's New Dialogue with Nature*, Bantam Books, New York, 1984, 伏見康治, 伏見 譲, 松枝秀明訳, 『混沌からの秩序』, 1987, みすず書房, p. 402-403.
- 8) Aeschylus, *Prometheus Bound*, Loeb Classical Library, London, William Heinemann LTD., 1956, l. 454-458.
- 9) ここでは小アジアのイオーニア学派を意味している。自然哲学については、R. E. Allen & David J. Furley, *Studies in Presocratic Philosophy*, 2 vols, Routledge & Kegan Paul, 1975, 参照.
- 10) R. Graves, *The Greek Myths*, Penguin Books, 1995, Vol. 1, 98.
- 11) 前掲書。および Karl Kerényi, *Die Heroen der Griechen*, Rhein-Verlag, Zürich, 1958, III, 3, テーセウスの出国に際して、父親アイゲウスは黒い帆（失敗）と白或は赤い帆（成功）を用意させている。そのいずれかの帆をかかげて帰国するようにしたのである。
- 12) アリアドネーの糸に類する例は、ほかにも数多く見うけられる。『青い鳥』でチルチル、ミチルがパンくずをこぼしながら森の中へ入って行くのも、この類にいれることができる。
- 13) しかしながら、つぎのような説はもっともらしく見えても、誤った虚偽であり、飾でふるっても、ひとかけらの真実も見あたらない。「ホームー時代の侵略者たち（ギリシア人——筆者註）は、牧歌的とさえよべる野蛮人であった。（中略）キプロスの石工術になる偉大な壁は、片目の巨人族が築いたのだと想像し、クレタでは、半人半牛の強力な海の王がいきりくんだ迷路のような通路のある宮殿に住んでいて、たくみに敵をいけどりにするのだと信じた。」(P. L. ラルフ, 『西欧文明史』小野寺健, 由良君美訳, グロリア・インターナショナル INC. 1971, p. 40)
- 14) ここで「空間的要素が稀薄」というのは、時間に対応する区切られた「場」が生じないこと、「時間的要素が稀薄」というのは、階列的「場」の不足をいう。

- 15) 時間はつねに具体的な「場」の意識をとめない、「時」の意識はそれに対応する空間が想定されている。たとえば「駅から歩いて3分」という表現は、駅から近い距離、ということであり、「3日たった」と言えば、その間につめこまれ状態やさまざまな行為を同時に意味している。
- 16) 否在と容在については、私の特殊な用語で、『文化素としての個性』(〈横浜経営研究〉XIV, 2, 1993) および『虚像の本質』(〈時間と空間〉10, SURの会, 1981) 参照。
- 17) Edmund Reach, *Culture and Communication—The logic by which symbols are connected An introduction to the use of structuralist analysis in social anthropology*, Cambridge University Press, 1976. 青木 保, 宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』, 紀伊国屋書店, 1991<sup>15</sup>, p. 103.
- 18) 前掲書, 第5章「熱力学の三段階」, 第7章「時間の再発見」参照。
- 19) Karl Kerényi は「彼女はこの策略を巨匠ダイダロスからなにも学ぶ必要がなかった」とし、後代の語り手の説をとっている。前掲書, *Die Heroen der Griechen*, 1958, 高橋英夫, 植田兼義訳『ギリシアの神話——英雄の時代』, 中央公論社, p. 255.
- 20) この通路は、現実には廊下、部屋、階段、中庭 etc. という、それぞれ本来の機能をもった建築物の集合である。それが「通路」として容認されるのは、不安定ながらも、その虚構性を私たちが真理の在所として認めざるをえないからである。
- 21) Ilya Prigogine and Isabelle Stengers, *Order out of Chaos—Man's New Dialogue with Nature*, Bantam Books, 1984, New York. 伏見康治, 伏見 譲, 松枝秀明訳『混沌からの秩序』, 1987, みすず書房, pp. 369–370.
- 21) 前掲書. pp. 367–368.
- 22) ontarche はギリシア語 *όν* (存在) と *ἀρχή* (始元, 支配) との合成語で「個体元」と呼ぶ。phylarche も同様に *φυλή* (種族) と *ἀρχή* との合成語で「類体元」と呼ぶ。ontarche は個体を個体たらしめている元であることから、その中に個性をふくむ。phylarche は複数の個体間に共通する類性を固定し、維持している。
- 23) Erich Fromm, *Man for Himself*, Holt, Reinhart and Winston Ins., 1947, 『人間における自由』, 谷口隆之助, 早坂泰次郎訳, 東京創元社, 昭. 48, pp. 61.
- 24) Charles Darwin, *On the Origin of Species by Means of Natural Selection*, 1859. 『種の起源』八杉竜一訳, 昭. 48, 岩波文庫(上), 第2章, p. 64.
- 25) 今西錦司, 『生物社会と人間社会』, 今西錦司全集第5巻, 講談社, 昭. 51, pp. 239–244.
- 26) 今西錦司, 『ダーウィン論』, 中央公論社, 1993, p. 120.
- 27) Śankara, *The Brahmasutra Śankara Bhasya*, ed. by Anantkrisna Śastri, 2nd ed., Bombay, Nirnaya Sagar Press, 1938, 『不二一元論』, 服部正明訳, 中央公論社, 〈世界の名著〉1, 1969, p. 248.
- 28) Kenneth Clark, *Civilisation*, ch. 10, *The Smile of Reason*, The British Broadcasting Corporation and John Murray, 1969.
- 29) Marshall McLuhan, *Understanding Media, The Extensions of Man*, New York, McGraw-Hill, London Routledge and Kegan Paul, 1964. 『メディア論』, 栗原 裕, 河本仲聖訳, みすず書房, 1987, p. 192.
- 30) *The Athenian Agora*, American School of Classical Studies at Athens, 1962, 参照。
- 31) Pausanias は「プリュギア産大理石の100本円柱」と記している。また、神殿造営に関しては、「この市では、『オリュンポスに坐すゼウス』の古い神域を造営したのはデウカリオンだ、と言っている」とのべている。ΠΑΥΣΑΝΙΟΥ ΕΛΛΑΔΟΣ ΠΕΡΙΗΓΗΣΙΣ, Maria Helena Rocha-Pereira; *Pausaniae Graeciae Descriptio*, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, 1973. 邦訳, 『パウサニ阿斯ギリシア記』飯尾都人訳, 1991, 龍溪書舎, p. 36.
- 32) Vitruvius, *De Architectura Libri Decem*, Ad Antiquitissimos Codices Nunc Primum Ediderunt Valentinus Rose et Herman Müller-Strübing, Lipsiae, 1867, 『ウイトルーウィウス建築書』森田慶一訳, 東海大学出版会, 1989<sup>2</sup>, p. 113.
- 33) 前掲書. p. 113.
- 34) パウサニアースは、前掲書『ギリシア記』で、オリュンピアにあるローマの浴場や大劇場、フォルムにふれ(第5巻), またデルポイ編(第10巻)でもフォルムについて記しているが、いずれもブロンズ製の屋根にローマ人の特色を見ている。

[かわそこ しょうご 横浜国立大学経営学部教授]